「事大主義」の起源

姜　東　局

目次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．起源の時空間
Ⅲ．「事大主義」の出現
Ⅳ．「字小事大」と「事大主義」の相違
Ⅴ．「事大主義」と「脱亜論」の関係
Ⅵ．おわりに

Ⅰ．はじめに

本稿は、「事大主義」という用語の起源を明らかにすることを目標とする。この目標の意味を明確にするために

は、本稿が取り扱っている概念が「事大主義」であり、「事大」ではないことを強調しておく必要があるとおもわれる。周知のとおり、「事大」は諸子百家の著作の中に繰り返し登場した。その中でも、『孟子』の「梁恵王下」において詳しく議論されたことは、近世東北アジアにおいて、「事大」概念の広がりにおいて、決定的な要因となった。なぜなら、『孟子』が朱子学の「四書」の一部を構成していた結果、朱子学の拡散と土着化とともに、『孟子』の中の「事大」概念も東北アジア各国の言説において揺るぎ無い地位を獲得したからである。しかし、この歴史的事実が、直ちに「事大主義」の広がりを意味するかというとそうではなかった。「事大」は、殆どの場合「字小」と一緒に議論されており、「事大」と「主義」が一つになった「事大主義」という言葉は、儒家の経典にはもちろん、近世の著述においても、その存在を確認することができない。この事実から、「事大」と「事大主義」は、同じ「事大」という言葉を使いながらも、まったく異なる歴史性を持っていることが確認できる。

「事大」と「事大主義」の相違は、時間の軸だけでなく、空間の軸においても確認できる。漢字語の「事大主義」を日本・中国・韓国の辞書で引くと以下のような結果が得られる。まず、日本の場合、『広辞苑』で「事大」関連の項目を引くと、「事大主義」は「自主性を欠き、勢力の強大な者につき従って自分の存立を維持するやりかた」と、そして、「事大党」という言葉があって、「朝鮮で、一八八二年から日清戦争に至るまで、伝統を守って宗主国たる清国への臣属を主張した保守派。王妃閔氏が中心」と説明されている。[1] 韓国の『国語大辞典』には、「事大主義」が「一定の主義なしに、勢力が大きい国家や人にしたがって、自分の存立を維持しようとする主義」と説明されている。[2] そして『広辞苑』と同じく「事大党」も載っており、「①事大主義を拝んで、従う集団。②《歴》朝鮮王朝末期の保守的党派の一つ。壬午軍乱を契機にして、閔妃一派を中心に組織され、大国である清国の力を借りて、政権の維持を謀った事大主義派。日本を背景にして自主独立を標榜する独立党と対立し、これを抑えていたが、一八九四

年に勃発した日清戦争で清国が敗北すると、自然に事大党も滅びてしまった。事大守旧党。守旧党。」と定義されている。[3] しかし、中国で刊行された『漢語大詞典』をみると「事大」の説明としては「小国が大国を奉じながら仕えることを指す」という、[4]「字小事大」の「事大」に関する説明はあるが、「事大主義」・「事大党」の項目は存在しない。「事大主義」概念をめぐっては、伝統と近代という時間的な断絶だけでなく、日本・韓国と中国の間において空間的な断絶をも存在していることがわかる。

「事大主義」を議論した先行研究において、「事大」と「事大主義」との間における断絶は殆んど認識されなかった。その結果、これまでの研究において春秋戦国から近世までの「事大」と近代以降の「事大主義」が、同じものであるかのように認識されることにより、「事大主義」の起源を古代に求めることが定説になってきた。[5] 本稿は、「事大」と「事大主義」の相違に着目して、近世以前から東北アジアに広がっていた「事大」とは違って、近代以降に登場し、日本と朝鮮半島で安定した地位を獲得することに成功した「事大主義」の概念の起源を探ることを試みる。

Ⅱ．起源の時空間

「事大主義」の起源を探る本稿は、一八八〇年代中盤の日本を舞台とする。研究対象となる時空間のこのような設定は、一義的には近世以降の東北アジア政治史・国際関係史資料を調べた結果、「事大主義」が使われた最初の記録がこの時空間で発見されたという研究の成果に基づいている。ところが、筆者が未だ目を通していない資料や将来新しく発掘される資料から「事大主義」が発見されることによって、「事大主義」の初登場の舞台が違った時空間に

移る可能性が厳存することは認めざるをえない。ただし、概念の起源を探究する作業が運命的に抱える上記の難点の存在を認めながらも、以下の二点から、「事大主義」の起源を探るに当たって一八八〇年代中盤の日本を対象にすることは、依然として支持されうると思われる。

第一に、近代東北アジアの政治的・思想的背景を考慮すると、日本ではない国家で、「事大主義」概念が発明されることは考えにくいからである。「事大主義」は中国的世界秩序において存在していた「字小事大」の「事大」を再解釈したものである。ところが、日本で「事大主義」の用例が確認できる一八八〇年代中盤に清と朝鮮の大多数の人々は依然として中国的世界秩序の「字小事大」に対する揺るぎない信念を保持し、実際両国はそれに基づいた朝貢・回賜を続けていた。すなわち、「字小事大」を再解釈するための政治的・思想的背景がまったくといってもいいほど存在しなかったのである。したがって、中国や朝鮮において「事大主義」概念が日本より先に登場することは想像しにくい。

第二に、「事大主義」という言葉の初登場が必ずしもその起源を意味しないからである。中国と朝鮮とは違い、明治維新の後は西洋近代を文明の基準にしていた日本において、「事大主義」のもっと早い用例が見つかる可能性はないとは言えない。ただし、本稿が探っているところの、今日日韓で通用されている「事大主義」概念の起源は、必ずしもその発見によって覆されるとは思えない。なぜなら、後述するように、今日の「事大主義」概念の系譜は、一八八〇年代中盤の日本で生まれた特定の「事大主義」の概念から始まることが確認できるからである。その以前誰かによって「事大主義」という言葉が使われたとしても、それは我々の使っている「事大主義」の起源とは直接的な継承関係をも持たない可能性が極めて高い。

では、一八八〇年代中盤の日本で、「事大主義」をめぐって如何なる変容が行われたかを考察してみよう。

Ⅲ．「事大主義」の出現

一八八四年十二月十五日号の『時事新報』には以下の文章が載っている。

韓廷の臣僚中、苟も支那人に依頼する者は内に居て自から重きを為すの勢なれば、争ふて媚を隣国に献じ、大国の命には従はざる可らずと云ひ、大国の政府には事へざる可らずと云ひ、之を事大の主義と称して、甚だしきは国を挙げて中華に内附を願はんなど発議する者さへある其最中に、独り国王陛下と一、二の近臣は窃に之を悦ばずして、飽くまでも自国独立の大義を守り、……殊に其外戚閔氏の如きも所謂事大党の一にして……然るに此近臣の重立たる者は金玉均、朴泳孝、洪英植、徐光範等の流にして、其主義とする所は国王陛下を佐けて朝鮮国独立の名実を全うせんとするものにして、之に党名を附すれば独立党と称して当可しと雖ども……朝鮮の国内に居て独立の主義を執る者は時として日本党と云はるゝこともあり。既に日本党と云へば、彼の事大党は支那党と名乗り、日本と支那と相対するが如くなれども、其実日本国が朝鮮に対するは唯国と国との交際なれば、固より彼の国事に参る可きに非ず。況や其朝臣等の間に行わるゝ内部の情実に於てをや、断じて我国の知る所に非ず。故に仮令ひ其中に誰れ彼れが日本党と云はるゝことあるも、唯偶然の名にして、彼の国情の実際に於いては事大党と独立党の二派あるに過ぎざるなり……以上の推察の如き事情なれば今回の事は唯朝鮮国内部の変乱にして、且大臣を暗殺し又誅戮するが如きは、彼の国に珍しからぬ事なれば、在朝鮮の日本国人に毫も関係なき筈なる（傍点は筆者）。[6]

「事大主義」は、この記事によって、生まれたのである。記事が書かれた時期から、「事大主義」は、甲申政変という東北アジア国際政治の大事件を背景にして創られたことがわかる。次に、記事が載っている媒体から、「事大主義」という言葉を創ったのが、『時事新報』の記事の書き手—すなわち、福沢諭吉と彼の門下生を中心とする一群のジャーナリスト—であったことがわかる。また、記事の内容から、「事大主義」・「事大党」は清と朝鮮の両国関係を表現する言葉として生まれたことがわかる。まず、甲申政変を背景に、福沢等が清と朝鮮の関係を説明するにあたり、「事大主義」を発明した文脈を理解するため、甲申政変以前の段階において、清と朝鮮の関係に関する日本のジャーナリズムの議論が如何なる歴史をたどってきたかを考察しておこう。

一八八〇年代初めの日本において、朝鮮が清の「属国」ではなく、「独立国」であることは当然の事実として受け入れられた[(7)]。但し、一八八二年の壬午軍乱の際、清が朝鮮の内政に干渉する動きが明確になると、この認識に関する再検討が避けられなくなった。日本政府はもちろん、民間でも一八八二年の壬午軍乱とそれに伴う清の行動によって大きな衝撃を受け、ジャーナリズムを中心に清と朝鮮の関係を如何に理解すればいいかという問題に取り込むに至った。その結果、壬午軍乱の直後から、清と朝鮮との関係を記述する記事が大量にあらわれたのである。たとえば、『東京日日新聞』には「清と朝鮮の関係一・二・三」という記事が、一八八二年八月二五・二六・二八日に各々掲載された。そこでは、「清総理衙門諸大臣ノ胸中ヲ察スルニ今日ニ於テモ尚ホ外ニ向テ朝鮮ハ清之属邦タル虚名ヲ維持シ以テ夸大自喜バント欲スルヨリ遂ニ従来ノ放任政策ヲ一変シ時期アラバ之ニ干渉セント」して、壬午軍乱における清の対朝鮮政策変化を清が放任政策を変え、虚名を実際の関係にしようとする試みとして把握した[(8)]。この論説の続きでは、朝鮮は「属国」ではなく「独立国」であることを、歴史的な例と西洋近代国際法、そして清の言説を挙げながら論弁しようとしている[(9)]。他の新聞も一八八二年八月・九月に清と朝鮮との関係について競い

合って議論したが、議論の構造は『東京日日新聞』のそれと大体一致していた。ここから見ると、壬午軍乱以降における民間の議論も、西洋近代を文明の基準にし、西洋近代国際秩序観に基づいて両国の問題を把握する点からは、政府のそれと区別されるべき論理的な相違性がないといえよう。「独立国論」の維持の確認というほぼ同じ内容を他のチャンネルを通じて発信し、議論したのである。[10]

ところが、『時事新報』を担うことになる福沢諭吉等の清と朝鮮との関係に関する認識は如何なるものであったのか。[11] 松沢弘陽によると、少なくとも一八七〇年代中盤から福沢は日本の文明開化過程のアナロジーによって、朝鮮の過去と現在を説明していた。[12] 実際、一八八二年三月十一日に、『時事新報』の論説で「日本と朝鮮と相対すれば、日本は強大にして朝鮮は小弱なり。日本は既に文明に進て、朝鮮は尚未開なり」と書いたことから、[13] 一八八二年の時期においても、議論の特徴が変わっていないことが確認できる。そして、朝鮮の問題はあくまで内政に焦点を合わせられ、国際法的地位問題は「独立国」ということで解決済みと思われるので、当然にも議論されなかった。

朝鮮の清からの「独立」を前提にして、日本の助けによる文明開化を目指すという福沢等の朝鮮への理解に大きな変化があらわれたのは、やはり壬午軍乱の時期であった。この時から前節で引用した他のジャーナリズムの反応と同じく、福沢等も清と朝鮮との関係、すなわち朝鮮の外交の問題—清・朝関係—にも議論を広げることになった。福沢等は、一八八二年八月二一日から二五日まで、「日支韓三国の関係」を、また、八月二九日から九月一日まで「支那国論に質問す」を書くなど、壬午軍乱の直後には清の「属国論」への対応に努めたのである。その際、彼等の立場は、もちろん「独立国論」であった。清の関与について、「例へば朝鮮の関係に於ても、吾人は固より其独立を妨げざるのみならず、常に之を助けんと欲すと雖も、支那人が頻りに韓廷の内治外交に干渉して、甚しきは其独立をも危くするの勢に至るときは、吾人は日本国人の本分として支那人の干渉を干渉して之を抑制せざる可ら

ず」として、[14]清の干渉—彼等は大院君の拉致、借款、外国人顧問の推薦、などをあげている—を朝鮮独立の維持の観点から警戒している。要するに、壬午軍乱の時期から、福沢等の朝鮮をめぐる議論でも、清と朝鮮の両国関係という外交問題が重要な議題として登場し、「属国論」に対して「独立国論」が唱えられたのである。

しかし、清の新しい対朝鮮政策を目の当たりにしても、福沢等は、朝鮮の将来を悲観してはいなかった。福沢等は、「同臭相投ずるは自然の勢にして、朝鮮の老儒輩も支那論に感服する者多からんと雖ども、毫も意に介するに足らず」と書いて、[15]朝鮮の儒者の中国への傾斜を気にする必要がないと主張した。福沢一門から見ると、壬午軍乱は朝鮮頑固党の起こしたものであるが、この頑固党は「わが国の国学者と神風連のごときもの」であり、「文明の敵」であった。[16]日本の歴史的な例から見て、「文明の敵」は滅びるはずであり、気にすることはないという立場であった。[17]これは、福沢の日本の立場からの単系発展論からすれば当然の認識であろう。

このような議論がある中、朝鮮半島において、清からの「独立」をもっとも重要な目的として掲げたクーデターが起こった。上記の『時事新報』の記事のタイトルである「朝鮮事変」は、一八八四年に起こったこのクーデター、すなわち「甲申政変」の失敗を背景としていた。甲申政変を取り扱っているこの論説における福沢等の主張の核心は、記事の最後の部分で明らかなように甲申政変と日本とは関係がないということである。この主張の反論として彼が想定している議論は、「開化派」が「日本党」と呼ばれてきたという、当時は常識的事実であった。彼らは「日本」と「清（＝支那）」の中で、どの国に関係をもつかを基準にして朝鮮の政治勢力を区別することを拒否することで、「日本党」と「支那党」という名称自体が誤りだと主張した。朝鮮をめぐる日本と清との対立という図式の代りに、福沢等は「事大」と「独立」の対立の図式を導入した。それによって、朝鮮の政情は「事大の主義」をもつ「事大党」と「独立党」の葛藤となり、甲申政変は清・日本などが絡み合った地域レベルの事件ではなく、あくまで朝

鮮国内部の変乱であると主張されたのである。

　福沢等が主張している甲申政変理解を当時のコンテクストから検証してみよう。まず、甲申政変が「唯朝鮮国内部の変乱」であるという意見について。上記の「東洋の政略果して如何せん」でみえるように、壬午軍乱から甲申政変までの時期に、福沢等の朝鮮の情勢を把握する図式は大雑把に言えば、変法的開化派と清との対決であった。そして、福沢は変法的開化派への日本からの支援を唱えたのである。そこで、彼の現状意識では、清という外国が朝鮮における葛藤の主体であったし、そして、彼の意図では、日本と清という地域レベルの対決と、朝鮮の変法的開化派とそれ以外の諸政治勢力という国内レベルの対決という二つのレベルをもつべきであった。そして、甲申政変が朝鮮国内レベルの対立であると同時に清と日本の地域レベルの対立であることは、政変に関与していた福沢自身がもっともよく知っているはずであった。それにもかかわらず、「朝鮮事変」における福沢等の議論では、清と日本の国際的なレベルの対立の面は急に見えなくなったのである。

　第二に、「独立党」と「事大党」の葛藤という図式について。政変以前における「独立党」と「事大党」に該当する言葉をいくつかあげよう。まず、福沢等がいう「独立党」をさす名称としては、「開化党」[18]、「開論党」[19]、「改進家」[20]、「開国党」が使われたが[21]、もっともよく使われたのは「日本党」であった。一八八四年十一月四日、金玉均らが竹添進一朗朝鮮公使を訪問し、クーデター断行の決意を述べたことについての記録でも、朝鮮の開化勢力を指す言葉が「日本党」であったし、竹添がクーデター計画の進行していることを伝えるとともに、日本側の対策を述べた「対韓策甲乙二案」でも金玉均らのグループを「日本党」と表現している[22]。また、吉田清成は井上馨へ送った文章で、「日本党政権」という表現を使ったし[23]、伊藤博文も「日本党」を使っていた[24]。そして、朝鮮の指導的な開化派の一人であった朴泳孝の甲申政変直前における朝鮮の政治勢力の分析でも、「日本党」は「支那党」と一緒に使われ

た。[25] また、政変が終ってからも天津条約で、伊藤博文と李鴻章の談判で伊藤が「日本党」を頻繁に使ったし、[26] 井上馨も「中国日本両党」という表現を使っている。[27] 西洋人の例を見ると、アレンは彼の日記に甲申政変を叙述しながら金玉均に対して、「Japanese or Anti - Chinese Party」の一員として紹介している。[28]「日本党」は、朝鮮の「変法的開化派」をあらわすもっとも有力な表現であったといえよう。

次に「事大党」も様々な名称でいわれてきた。「頑固党」[29]、「攘斥党」[30]、「支那党」[31] などが使われた。アレンは前述の日記で、「the Chinese or Anti-Japanese Party」・「the Chinese Party」などを使っていた。[32] 何よりも「事大党」という言葉が、福沢の記録でも見当たらないことは興味深い。壬午軍乱までは、福沢は朝鮮と清との中国的世界秩序の関係が終ったと思い、朝鮮の内政の文明化を目指したので、「事大」という概念に関心を寄せなかった。また、壬午軍乱以降には外交が問題になってはいたが、福沢は外交問題の相手として清に注目し、朝鮮の内部の保守派については、文明の基準を適用した「頑固党」と名づけたのである。結局、「事大党」は福沢等によって甲申政変直後に再発見されたのである。

また、「事大党」への名称の変化とともに、「保守派」―「頑固派」と「事大党」―に対する評価にも変化が現れたことを指摘しておきたい。先ほどの引用でみたとおり、壬午軍乱後にも、福沢は朝鮮の保守派を、日本において攘夷論者がそうであったように、すぐ滅びるはずの「老儒輩」とみなしていた。ところが、今度の「事大党」は同じ対象を指すにもかかわらず、「国王陛下と一、二の近臣以外」の多数を占める主な勢力として位置づけた。そして彼等は、以前には「支那論に感服する者」にすぎないと評価されたが、今は一つの主義をもつグループと評価され、この主義が「事大の主義」であった。甲申政変を境目に福沢の議論において、朝鮮の保守派がもっている勢力や彼等の理念の自発性などについての評価は、著しくかわったのである。

上の二点からは、甲申政変の後において福沢の第一声であった、「事大党・事大主義」と「独立党・独立主義」の対立としての朝鮮政局を把握する枠組みの「読み替え」は、その主張が正確でもないし、また以前の議論とは大きな断絶の結果であることが確認できる。何がこのような意図的な誤謬への急な変化をもたらしたのか。

「朝鮮事変」に続く朝鮮に対する福沢等の論説は、その二日後の十二月十七日のものであったが、そこには「今回の事変は全く朝鮮国にて、支那党即ち事大党と独立党との軋轢にして・・・・・・事大の主義に依々する閔泳翊の如きは・・・・・兎に角に今の混雑なる事情中に、朝鮮に日本党の名ありては、世間或は其日本の文字を支那党の支那の字と如くに解し、日本人が彼の内政内事に関係するなどの嫌疑を生ずる可きも図る可らず。我輩の最も好まざる所なり」と書かれている[33]。甲申政変の国内問題化や「事大党」・「独立党」の図式を使うことは、「朝鮮事変」の論理そのものであった。そしてそのタイトルは「朝鮮国に日本党なし」であった。「朝鮮事変」と同じく結局、甲申事変において日本がその勃発とは関係がないことが主張の核心であった。福沢等は、甲申政変の直後に、「日本党」の存在を消すことを最初の主張にして、またそれを繰り返して議論したのである。当時のコンテクストでこの主張は如何なる意味をもっていたのか。

甲申政変が失敗に終った後、日本政府においてもっとも厄介な問題は竹添公使などが朝鮮の変法的開化派とともにクーデターに参加したことであった。実際、朝鮮に謝意表明を迫ったのも、竹添の内政干渉を隠蔽するためであった[34]。そして、その問題は福沢自身の問題でもあった。甲申政変における福沢の役割が主導的なものであったか、それとも支援にすぎなかったかという点は論争の余地があるが、福沢が政変に関与したのは確かであろう[35]。たとえば、甲申政変を主導した金玉均は日本政府の本心をさぐるため「福沢先生」に尋ねたし、福沢は、金玉均と井上との間に電信の暗号をもっていた[36]。そして、福沢は政変に使われた刀剣、爆薬類を提供したのである[37]。当時の日

本政府は朝鮮の改革運動を穏健的・漸進的なものになるように誘導しようとしており、その枠組みを超える活動に対しては反対していたため[33]、福沢等の甲申政変への関与と失敗は日本政府からの非難の対象になることは必至の状況であった。このような状況で、甲申政変の国内問題化と「事大」・「独立」の枠組みの導入による日本の関与の否定は、一方では、日本の外交的状況を有利にする論理であり、福沢等にとっても政治的な窮地から抜け出すために役立つ論理であったことは確かであろう。

これまでの議論から、「事大主義」と「事大党」の登場を整理して見よう。まず、甲申政変の失敗後に、福沢等に必要であった作業は甲申政変における日本の係わりの痕跡を消すことであった。それは、朝鮮のめぐる東北アジア地域レベルの清と日本の対立を無くすこと―甲申政変の国内問題化―で可能になる。この変化によって「支那党」とともに「日本党」も消える。ところが、福沢等が主張してきたように、それまでの対立が日本の支援を受けている「日本党」と「清」によるものであったので、「日本」とともに「清」を消すと如何なる勢力と「独立」を主張する「開化派」が戦ったのかという問題が提起される。そこで、これまでは有名無実な存在だと評価していた「頑固派」を再評価して、一つの政治勢力にまで引き上げることが必要となった。福沢等がこの「頑固派」に貼った新たなレッテルが、「事大の主義」をもっている「事大党」であった。

Ⅳ．「字小事大」と「事大主義」の相違

今日では日本語のみならず、韓国語・朝鮮語でもおなじみの「事大主義」という言葉は、以上のような明治国家の、且つ福沢一門の政治的な利害を背景にして、一八八四年末に日本語として登場したのである。すでに、二〇〇

○年以上の歴史を持っていた「事大」は再発見された。ただし、再発見された「事大」―すなわち、「事大党」・「事大主義」の「事大」―が、同じ記号表現（シニフィアン）で表象されながらも、中国的世界秩序での「事大」―すなわち、「字小事大」の「事大」―とは、記号内容（シニフィエ）が異なるのは当然のことであった。以下、記号内容の差について、考察してみよう。

福沢等の「事大」と清と朝鮮の「事大」との根本的な差は、それが置かれた文明的コンテクストの差に基づいていた。すなわち、福沢等は西洋近代国際秩序を基準としていたので、「事大」とは西洋近代国際観に入ってきた異質的な存在になった。そして、「事大」は、その概念とは何の関係も無かった西洋産の概念と新しく関係を設定しなければいけない状況に置かれたのである。この西洋近代国際秩序観からの「事大」の「読み替え」は、悠久な歴史を持つ「事大」概念に如何なる変化をもたらしたのか。

この問題を考察するためには、まず、「字小事大」の「事大」の意味を明確にしておく必要があろう。諸子百家の中で、『墨子』・『韓非子』のような非儒家系統の文献では、「以小事大（＝事大）」の関係を力の強弱として把握していたが、『春秋穀梁伝』・『春秋左氏伝』・『孟子』・『周礼』など儒家の文献では、「事大」が単純な力関係によるものではなく、礼の側面をも持つという解釈が現れた[39]。儒学を体制教学として採用していた明・清や朝鮮に共有されていた国際秩序観は、もちろん後者の儒学的な価値観に基づいていた。ところが、周知の通り、儒家のどの経典を強調するか、それをどう解釈するかという立場は、時代によって変化してきたので、特定の時期の概念を対象にする場合は、当時における儒学の特徴を考慮しなければいけない。近世の東北アジア三国―日本の参入はかなり遅いが―においては、朱子学が、儒家経典の選択とその解釈の根拠になっていた。

朱子学の儒家経典理解を典型的に示す『四書集注』の中で、『孟子』「梁恵王下」に「事小（＝字小）」・「事大」という概念が登場する。斉の宣王が孟子にこう質問をした。「鄰国と交わるのに道はあるのか」と。孟子の答えは、

「あります。もっぱら仁者だけが、自分の国が大国であっても小国に事えることができます。それ故、湯王は葛伯に事え、文王は昆夷に事えました。もっぱら智者だけが自分の国が小国であっても、大国に事えることができます。故に太王が獯鬻に事え、句践が呉に事えたのです」であった。[10]

朱子は、『孟子集注』で、「仁者の心は、広くておもいやりがあり、大小や強弱を比較し、測る私がない。故に小国が恭順しなくても、我々の彼等を字する心はやむことがない。智者は義理に明るく、時勢を知る。故に大国に侵害・陵辱されても、我々の彼に事える礼は敢えて廃止しない」という解釈をなしている。[11]一見、孟子の言葉を丁寧に解釈しているように見えるが、この文章ですでに、朱子学の独等の解釈のための基礎作りが行われていた。朱子学における儒家経典の理解方法は、経典の言葉一つ一つの意味を正確に理解するという意味での解釈にとどまらなかった。「理」と「気」を中心に、厖大な思想体系を創り出して、経典の一句一句をその体系の中に位置づける作業にまで至ったのである。朱子が、上記の注で「仁」について説明しながら、孟子の使っていない「私」という概念を持ち出すことは、注目に値する。朱子学において「私」とは、「人欲の私」として、「天理の公」と対立するものと理解される。この意味で、「私」の登場は、朱子学の根本的原理である理気論の適用を予告しいるとみなされる。実際に、続く経文に対する注において、朱子学の思想体系は、前面に出てくることになる。

上記の引用につづく『孟子』の経文は、「大国でありながら小国に事える者は、天を楽しむものであります。また小国でありながら大国に事える者は、天を畏れるものであります。天を楽しむものは天下を保ち、天を畏れるものはその国を保ちます」である。[12]朱子は、この孟子の言葉に、「天というものは、理である。大なるのが小を字し、小なるのが大に事えることは、皆理の当然である。自然の理に合う。故に、楽天という。敢えて理に違わない。故に畏大という」という注をつけた。[13]

『孟子』の文章において、「事小」と「事大」は共に「天」とのかかわりで説明されていることは注目に値する。孟子の言葉に、「天」が登場すると朱子は、「天即理」という朱子学の基本的な命題を、その解釈にいれた。その結果、「事小」と「事大」という国家の行動原理は「天」を媒介として、ともに「理」とつながれ、結局は、「理の当然」となった。この解釈は、儒学の歴史からすると、必ずしも、長く支持されたものとはいえないかもしれないが、少なくとも、近世の東北アジアにおいては、もっとも影響力のある解釈であった。[44]

朱子学でもっとも重要な経典の一つである『大学章句』の八条目の中では、「修身・斉家・治国・平天下」の字句がある。そこで、人間の営みのレベルは「身、家、国、天下」に分かれていた。ここで「天下」・「国」という範疇は、決して特別な存在ではなかった。そして、このレベルを一部とする全宇宙には、同じ原理―すなわち、「理」―が貫通していた。[45] 自然界から人間界を貫く「理」からみて、「事小事大」は必ず行うべきものになる。それゆえ、朱子学によると「上国」の「事小」と「属邦」の「事大」という相互的な原理は、礼の顕現の具体においては差異があるが、それが「理」との関係から、絶対的倫理性に基づいているという原理においては共通していた。

このような意味を持っている「字小事大」の「事大」と新しく創られた「事大主義」の「事大」は、少なくとも、以下の三点において、根本的な相違を見せる。

第一に、福沢等における「事大」は「字小」と切り離された。福沢の「事大」の議論では、中国的世界秩序観においては「属邦」からの「事大」に相応する「上国」からの「字小」は見当たらない。それによって、「字小事大」がもっている相互性が無くなり、「事大」が一方的なものと解釈されていることが窺える。

第二に、また、「事大党」と「独立党」、そして「事大の主義」と「独立の大義」と対比で明らかなように、「字小」の代わりに、「事大」と密接な関係をもって登場する概念は、「独立」であった。「字小」と「事大」との関係が類似

の関係であったとすれば、「事大」と「独立」の関係は、対抗の関係であった。ところが、「独立」は当時日本において、すでに重要な概念として定着していたので、日本における「事大」・「独立」両概念の構成の仕組みは、お馴染みの「独立」に対する理解に基づいて、それと対照する概念として「事大」を理解することであった。すなわち、福沢等において「事大」とは、西洋近代国際秩序における「independence」の和訳語として日本人の間で共有されてきた「独立」の対語であった。この再構成により、「事大」という言葉はもはや中国的世界秩序における意味を伝えることができなくなり、また、それをもって日本人に当時存在していた朝鮮と清の実像を反映することも期待できなくなった。

第三に、「事大」の価値評価は極端に変わった。「事大」は中国的世界秩序観において、「智」という「性」に基づいている行動であった。それゆえ、「理」に従うという絶対的倫理性を保っていた。ところが、福沢等において、「事大」は「独立」の対語であったので、西洋近代国際秩序観における「独立」がもっている価値評価のちょうど正反対が「事大」に与えられた価値評価になったのである。福沢において、「独立」は西洋近代国際秩序の根本原理だけでなく、新しい日本のもっとも根本的な徳目であった分、「事大」はもっとも非難すべき悪徳と位置づけられたのである。

思えば、「字小事大」の「事大」は中国古典からの二〇〇〇年以上の歴史をもっている概念である。そして、実際「字小」がそうだったように、もし中国的世界秩序がなくなると、「事大」概念もそれとともになくなる運命の概念であったろう。しかし、「事大」は「事大主義」・「事大党」としては今でも日本と朝鮮半島で生きている。その生存は、今日の「事大」概念が、西洋近代国際秩序において、何らかの意味があるからである。「独立」の反対概念であることはまさに今日の「事大」概念製造の近代性を物語るし、これこそ近代的な概念が横行している東北アジア

において「事大主義」が未だに堂々と通用している理由であろう。中国的世界秩序における「事大」とはあまりにも異なる近代的な意味での「事大」は、このように誕生し、位置づけられたのである。(16)

Ⅴ.「事大主義」と「脱亜論」の関係

最後に、「事大主義論」は、一八八五年三月の「脱亜論」の登場における論理的前提でもあったことを指摘しておこう。「脱亜論」には次の文章がみえる。

> 然るに爰に不幸なるは近隣に国あり、一を支那と云ひ、一を朝鮮と云ふ。此二国の人民も古来亜細亜流の政教風俗に養はるゝこと、我日本に異ならずと雖ども、其人種の由来を殊にするか、但しは同様の政教風俗中に居ながらも遺伝教育の旨に同じからざる所のものある歟、日支韓三国相対し、支と韓と相似るの状は支韓の日に於けるよりも近くして、此二国の者共は一身に就き又一国に関して改進の道を知らず・・・・・幸にして其国中に志士の出現して、先づ国事改進の手始めとして、大に其政府を改革すること我維新の如き・・・・・活動あらば格別なれども、若しも然らざるに於いては、今より数年を出でずして亡国と為り、其国土は世界文明諸国の分割に帰す可きこと一点の疑あることなし。(17)

「脱亜論」が成り立つためには、アジア―特に、清と朝鮮―は同一性をもって、日本と区別されるものでなければならなかった。上記のように、「脱亜論」で、実際に清と朝鮮の類似性の強調により、区別の境界線が日本と清・朝

鮮の間に引かれたのである。ところが、甲申政変以前における福沢等の議論では、日本と朝鮮との類似性を強調し、区別の境界線は日本・朝鮮と清の間に引かれていたのである。甲申政変を境に、黄海を通過していた文明の境界線が日本海を通過することへ変更されたのである。この変更は、日本と朝鮮とのアナロジーを放棄する作業と、清と朝鮮との同一性を究明する作業によって可能になる。福沢等において、前者は「独立党」と「独立主義」の絶滅によるものであり、後者は「事大党」と「事大主義」の隆盛によるものであったのである。「脱亜論」発表の直前に書かれた「朝鮮独立党の処刑」で朝鮮の開化派の絶滅を取り扱い、その中で「事大」と「独立」の論理が出ていたこと[48]、そして「脱亜論」の発表後には、『時事新報』に「朝鮮変乱の禍源」という[49]、「事大」と「独立」論理の集大成ともいえる記事が発表されたのは、「脱亜論」の前提作業として日本とは異なるアジアの創設において、「事大党」と「事大主義」は欠かせない論理であったことから考えると必然であった。そして、福沢が、「朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す」という皮肉な呪いを朝鮮にかけた際にも、朝鮮の支配勢力を「事大党」としたことも、このような論理に連続していた[50]。福沢等の「脱亜論」は、開化派が朝鮮からいなくなったという朝鮮の現実を説明するにあたり、朝鮮には「事大主義」があるからと決め付け、その延長において朝鮮も清と一緒にアジアの悪友にするという構造をもつ論理であった。「「脱亜論」の社説はこうした福沢の挫折感と憤激の爆発として読まれねばならない」ことは確かであろうが[51]、その憤激の底辺には、文明の境界の巧妙な再構成が存在していたのである。

Ⅵ．おわりに

福沢等によって生み出された「事大主義」・「事大党」概念は、その後繰り返して表明され、拡散された。『時事

新報』では、「事大の空気」[52]、「独立・事大両党を生み」[53]、「事大党閔族の権勢甚だ強盛にして」[54]、「朝鮮政府は自然と事大党の手に落ち」[55]という例にみえるように、一八八四年から一八八七年まで、「事大主義論」が繰り返し登場している。福沢等がもっていた位置を考えると、それが日本社会に広がったのは当然であろう。その例をいくつかあげてみよう。『朝野新聞』では、一八八四年十二月十七日では「守旧党・頑固党」という名称をつかっていたが[56]、その四日後には「事大党」を使っている[57]。また、『郵便報知新聞』では、一八八五年三月四日に「一挙して事大党の政府を覆へし己れ政権を握て八道の風紀を変改せんとしたる朝鮮独立党の党首」という文章が出るが[58]、この論理は、福沢等の創った論理と同じ構造であった。さらに、一八八五年十一月二九日の『東京朝日新聞』では「事大党と開化党、事大主義と開化主義」の対立構造で朝鮮の政局を分析した[59]。新聞はテレビやラジオがない当時において全国を対象とする唯一の大衆媒体であり、そして地方の新聞が中央の有力新聞の記事に頼っていたことを考慮すると、一八八〇年代中盤に「事大党・事大主義」の議論が日本に普及されたことは理解できよう[60]。

ただし、福沢等によって創出された「事大主義」の概念が、今日の「事大主義」の意味とは完全に一致していないことは、指摘しておきたい。福沢等の「事大主義」は、今日とは違って、まだ「脱歴史化」・「民族性化」されず、歴史、或いは時事を表現する意味で、限定されて使われたのである。まず、彼等において、「事大主義」とは一八八二年の壬午軍乱を契機に新しく現れた現象を分析する概念にとどまり、その時間的範囲が限定されていた。また、福沢等における「事大主義」は、朝鮮の中でも、一部の勢力—主に「閔氏勢力」—の特徴にすぎないことに、その適用範囲も限定され、「事大主義」が朝鮮民族全体の特徴には至らなかったのである。すなわち、「事大主義」の創始者において、「事大」概念は時間と適用範囲の面においてかなり限定された概念にあり続けた。ところが、朝鮮の国際的地位に関する議論が再び国際的な焦点となった日清戦争期に、次の世代によって「事大主義」が再解釈され

ることにより、ほぼ今日の「事大主義」の概念ができあがるに至った。但し、この変容は、福沢等によって創出された「事大主義」の定義を受け入れた上、それをもっと広い範囲へ展開したことにすぎないことも事実である。これらの事情から、「事大主義」の概念の完成ではなく、その起源を福沢等の言説から求めることは間違っていないと思われる。

今日の我々―すなわち、日本語とハングル語を主要な言語として使っている人々―は、一世紀も以前に慌てでかけられた概念の呪いからどのくらい自由になっているのであろうか。

注

(1) 新村出編『広辞苑　第五版』東京：岩波書店、一九九八年、一一七八頁。

(2) 「일정한 주의(主義)가 없이 세력이 강한 나라/사람을 붙좇아서 자기의 존립(存立)을 유지하려는 주의.」李熙昇編『国語大辞典』서울：民衆書林、一九八二年、一七二二頁。

(3) 「①사대주의를 받들고 좇는 무리.②[역]조선왕조말기의 보수적인 당파(党 派)의 하나. 임오군란(壬 午 軍 乱)을 계기로 하여 민비(閔 妃)일파를 중심으로 조직되어 대국인 청(清)나라의 힘을 빌어 정권(政 権)의 유지를 꾀하던 사대주의파. 일본을 배경(背 景)으로 하여 자주독립(自 主 独 立)을 표방하는 독립당(独 立 党)과 대립하여 이를 억누르고 있다가, 1894년에 일어난 청일전쟁에 청나라가 패하자 자연히 사대당도 무너지고 말았음. 사대수구당(事大守旧党). 수구당.」同上。

(4) 「指小国侍奉大国」、羅竹風主編『漢語大辞典〔一〕』上海：上海辞書出版社、一九八六年、五一五頁。

(5) たとえば、李春植は、古代中国―とりわけ、春秋戦国時代―を対象として、「事大」の形成過程を探る研究に「事大主義」というタイトルをつけている（李春植『事大主義』서울：高麗大学出版部、一九九七年）。

(6) 「朝鮮事変」『時事新報』一八八四年十二月十五日号、福沢諭吉著・慶応義塾編『福沢諭吉全集』第X巻 東京：岩波書店、一九六九年、一三八―一四〇頁（以下、『福沢諭吉全集』は『福沢』と略して引用する）。

(7) 日朝修好条規（一八七六年）の第一条において、「朝鮮国ハ自主ノ邦ニシテ日本国ト平等ノ権ヲ保有セリ」と宣言した以来、朝鮮の独立国論は続いてきたのである。日朝修好条規の成立については、田保橋潔『近代日鮮関係の研究』上、京城：朝鮮総督府中枢院、一九四〇年、一三三―五一一頁を参照。

(8) 吉田誠等編、『資料 新聞社説に見る朝鮮』Ⅱ、東京：緑蔭書房、一九九五年、一五二頁。

(9) 同書、一五二―一五七頁。

(10) 一八八〇年代から日清戦争まで、民間のレベルの朝鮮への認識変化については、研究の蓄積（坂野潤治『明治・思想の実像』東京：創文社、一九七七年。芝原拓自「対外観とナショナリズム」芝原拓自・猪飼隆明・池田正博校注、前掲書、四五八―五三四頁。伊藤之雄「日清戦前の中国・朝鮮認識の形成と外交論」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』京都：京都大学人文科学研究所、一九九四年、一〇三―一七一頁等）があるが、その内容は、政府内部の議論と大きな差を見せなかったことを指摘している点では同じである。

(11) 福沢諭吉研究において、長い間『福沢諭吉全集』に収録されている文章を福沢のものと見なすことが前提にされてきたが、井田進也によって『時事新報』の論説に対するテクスト認定の必要性が提起され、部分的ではあるが井田によって認定の作業が行われてきた。（井田進也『歴史とテクスト――西鶴から諭吉まで』東京：光芒社、二〇〇一年、二五―一〇八頁を参照）本稿は、一人の思想家を特定して彼の思想を取り扱う方法を使ってないので、「事大主義」の議論の持ち主として、一八八〇年代から一八九〇年代にかけて、影響力があった言説を生み出してきたグループとして福沢諭吉を中心とする福沢一門を想定することで議論を進めることにする。

(12) 松沢弘陽『近代日本の形成と西洋経験』東京：岩波書店、一九九三年、三五二―三六二頁。

(13)「朝鮮の交際を論ず」『福沢』『時事新報』一八八二年三月十一日号、Ⅷ、二八頁。

(14)「東洋の政略果して如何せん」『時事新報』一八八二年十二月九日号、同書、四三二頁。

(15)「牛場卓造君朝鮮に行く」『時事新報』一八八三年一月十三日号、同書、五〇五頁。

(16) 壬午軍乱の直後はもちろん、(「朝鮮政略」『時事新報』一八八二年八月二―四日号、同書、二五一頁)、甲申政変の四ヶ月まえ書いた記事のなかでも、福沢一門は朝鮮の開化反対勢に「頑陋党」という表現を使っている。(「朝鮮にある日本の利害は決して軽少ならず」『時事新報』一八八四年八月九日号、『福沢』Ⅹ、八頁)。

(17)「牛場卓造君朝鮮に行く」『時事新報』一八八三年一月十三日号、『福沢』Ⅷ、五〇五―五〇六頁。

(18)「朝鮮の開化党の有名な金玉均氏」『朝鮮新報』一八八二年三月十五日号、中山泰昌等編、前掲書Ⅴ、四八頁。また、「頑固党」と「開化党」の例は『時事新報』一八八二年八月七日号、同書、一二五頁。

(19)「開論党の領袖と称する閔参判泳翊」『東京日日新聞』一八八二年六月二一日号、同書、九四頁。

(20)「頑固党」と「改進家」の使用例は『東京日日新聞』一八八二年八月三日号、同書、一二一頁。

(21)「開国党」と「擯斥党」の使用例は『東京日日新聞』一八八二年八月七日号、同書、一二六頁。

(22) 金正明編『日韓外交資料集成』Ⅲ　東京：厳南堂書店、一九六六年、四―六頁。

(23) 同書、一二頁。

(24)「朝鮮ノ日本党」同書、三五八頁。

(25) 朴泳孝の支那党理解の特徴は、彼がそれを二分して理解したところにある。「朴　当政府中ニハ党派ト云フモ仰山ラシク候へド、其第一ノ支那党、第二ノ支那党及日本党之三党アリテ、第一ノ支那党ハ唯々支那ニ属従致シ居候ヘバ、国家太平ナリ必ラズ日本ハ信ジ難シト主張ノ者ニテ、第二ノ支那党ハ支那ニ属従ノ事ハ第一党ト同様ニシテ、其上自己ノ権力ヲ得ンガ為メ国王ヲ抱キ込、己レノ反対即日本党ヲ撲滅セントノ目的ニ候。」伊藤博文編、『秘書類纂　朝鮮交渉資料』中巻　東京：秘書類纂刊行

会、一九三六年、二六九―二七〇頁。

(26) 彼等の対話は英語で行われたので、「日本党」は英語での表現の和訳ではあった。金正明編、前掲書Ⅲ、三五八頁。

(27) 中央研究員近代史研究所編『清季中日韓関係史料』Ⅳ 台北：文海出版社、一九七二年、一六四二―一六四八頁。

(28) 金源模の翻訳に掲載されている原文からの引用。金源模訳『알렌의 日記』서울：檀国大学校出版部、一九九一年、四一三頁。

(29) 注二〇を参照。

(30) 註二一を参照。

(31) 「支那党」『朝野新聞』一八八三年五月十七日号、中山泰昌等編、前掲書Ⅴ、二九八頁。

(32) 金源模訳、前掲書、四一二頁。

(33) 「朝鮮国に日本党なし」『時事新報』一八八二年十二月十七日号、『福沢』Ⅹ、一四三頁。

(34) 高橋秀直『日清戦争への道』東京：東京創元社、一九九五年、一五一頁。

(35) 甲申政変における福沢一門の役割を強調する議論は、山辺健太郎の論文が先駆的である。山辺健太郎「甲申日録の研究」『朝鮮学報』一七号（一九六〇年）を参照。その限定性を強調する議論は、崔碩莞「甲申政変期の井上角五郎」『日本歴史』五三三号（一九九二年）などを参照。この問題の核心になる『甲申日録』に対する資料批判は、李光麟「金玉均의〔甲申日録〕에 対하여」『開化党研究』서울：一潮閣、一九七三年。康玲子「甲申政変の問題点―『甲申日録』の検討を通じて―」『朝鮮史研究会論文集』二二号（一九八五年）などを参照。

(36) 金玉均と福沢の関係に対する金玉均の叙述については、金玉均『金玉均全集』서울：亜細亜文化社 一九七九年、一〇九―一一九頁を参照。

(37) 石河幹明『福沢諭吉伝』Ⅲ 東京：岩波書店 一九三二、三四〇頁。

(38) 高橋秀直、前掲書、一四二―一四八頁を参照。

(39) 李用熙「対談　事大主義」서울：『知性』二月号（一九七二年）、一四一頁。

(40) 「斉宣王問曰、交鄰国有道乎。孟子対曰、有。惟仁者為能以大事小、是故湯事葛、文王事昆夷、惟智者為能以小事大、故太王事獯鬻、句践事呉。」朱熹撰『四書章句集注』北京：中華書局、一九八三年、二一五頁。

(41) 「仁人之心、寛洪惻怛、而無較計大小強弱之私。故小国雖或不恭、而吾所以字之之心自不能已。智者明義理、識時勢。故大国雖見侵陵、而吾所以事之之礼尤不敢廃。」同上。

(42) 「以大事小者、楽天者也、以小事大者、畏天者也。楽天者保天下、畏天者保其国。」同上。

(43) 「天者、理而已矣。大之字小、小之事大、皆理之当然也。自然合理。故曰楽天。不敢違理、故曰畏天。」同上。

(44) 朱子と異なる解釈として、清代の焦循の例があげられる。朱子の解釈には様々な違いがあるが、もっとも主だった違いは、焦循の解釈では、「天」と「理」との同一性が前提されておらず、この文章が巨大な思想体系の一部に位置づけられることがないという点である。焦循撰・沈文倬点校『孟子正義』上　北京：中華書局、一九八七年、一一〇―一一三頁。

(45) このように「国」が他の社会的範疇を圧倒する重要性をもたず、また普遍的原理が貫通する世界観の下では、思想的に国家理性などが「理」から独立して存在することができなかった。中国的世界秩序の理念型では、「身」・「家」・「天下」がそうであるように、「国」も「理」にしたがって行動する他ない。これは、下位の個人や社会関係のレベルとも、その上位の世界的な普遍のレベルとも異なる国家レベルが決定的な重要性をもつようになり、徐々に国家固有の原理である国家理性が自然法から抜きん出ていった当時の西洋近代国際秩序観とは、全く異なるものであったのだ。「修身・斉家・治国・平天下」の論理と「国家理性（＝国家理由）」の論理に関する見事な対比については、島田虔次『隠者の尊重――中国の歴史哲学』東京：筑摩書房、一九九七年、三―三〇頁を参照。

(46) 第Ⅱ章において、「事大主義」の起源を一八八〇年代中盤の日本という時空間を舞台にして議論することの整合性について、二点の根拠に基づいて説明した。ここでは本稿の研究結果から、時間の設定に関わる根拠をもう一点だけつけ加えたい。第Ⅲ・

Ⅳ章において、「事大主義」と「事大党」の密接な関係、すなわち、「事大」に関する共通する再定義に基づいていることや、思想の内容と担い手を表す言葉として一つのセットになっていることがわかる。そこで、「事大党」の起源の追跡は、すなわち「事大主義」の起源の追跡になる可能性は、すこぶる高いと思われる。ところで、今日の「事大党」という言葉の意味を吟味してみると、「事大主義」とは違って、言葉の起源の痕跡がはっきり残っていることが目を引く。第Ⅰ章で紹介したように、『広辞苑』（日本語）には「一八八二年から日清戦争に至るまで」、そして、『国語大辞典』（ハングル語）には、「壬午軍乱を契機にして、閔妃一派を中心に組織され、・・・・・・一八九四年に勃発した日清戦争で清国が敗北すると、自然に事大党も滅びてしまった」と時期が明示されている。これらの記述は、「事大党」の起源は、どんなに早くても、一八八二年以前には想定できないこと、すなわち、「事大党」が一八八〇年代中盤になってから登場した概念であることを如実に物語っている。そして、上述した「事大党」と「事大主義」との密接な関係を考慮すると、「事大党」に残されている起源の痕跡は、間接的ではあるが、本稿の時間設定の正当性の根拠になりうると思われる。

(47) 「脱亜論」『時事新報』一八八五年三月十六日号、『福沢』Ⅹ、二三九頁。
(48) 『時事新報』一八八五年二月二六日号、同書、一五八頁。
(49) 「朝鮮人民のために其国の滅亡を賀す」『時事新報』一八八五年八月十三日号、『福沢』Ⅹ、三八〇頁。
(50) 『時事新報』一八八五年三月三一日号、吉田誠等編、前掲書Ⅴ、二〇八―二〇九頁。
(51) 丸山真男『福沢諭吉の哲学』東京：岩波書店、二〇〇一年、二八三頁。「脱亜論」をアジア侵略の言説として見なす既存の理解に対して、それを否定するという意味で、同じ趣旨の議論としては、坂野潤治、前掲書、五二―五七頁を参照。
(52) 「朝鮮国の独立」『時事新報』一八八五年四月二日号、吉田誠等編、前掲書Ⅴ、二〇九頁。
(53) 「井上角五郎氏再び朝鮮に赴かんとす」『時事新報』一八八五年十月一日号、同書、二二七頁。
(54) 「朝鮮国小なるも日本との関係は小ならず」『時事新報』一八八六年一月六日号、同書、二三三頁。

(55) 「朝鮮国王退位の風説」『時事新報』一八八七年二月二四日号、同書、二四六頁。

(56) 「日支の関係」『朝野新聞』一八八四年十二月十七日号、吉田誠等編、前掲書Ⅲ、一一五頁。

(57) 「我邦ノ支那ニ対スル政略如何」『朝野新聞』一八八四年十二月二一日号、同書、一一七頁。

(58) 「朝鮮の国事犯罪人」『郵便報知新聞』一八八五年三月四日号、吉田誠等編、前掲書Ⅳ、二三九頁。

(59) 「朝鮮事件」『東京朝日新聞』一八八五年十一月二九日号、吉田誠等編、前掲書Ⅵ、一〇六頁。

(60) そして、福沢等は『時事新報』の紙上だけで「事大・独立」の議論を展開することにとどまらず、有力な政治家への政策的な働きかけにも使ったと思われる。たとえば、『秘書類纂』に載っている「朝鮮政略ニ関スル意見ノ私書」では、「其他ハ所謂ル事大党ナルモノ朝野ニ充満シ、枢要権力ノ地ハ皆事大党ノ占ムル所トナリ、社会の実柄挙テ此輩ノ手ニ係レリ、加フルニ彼国財用大ニ窮竭シ、動モスレバ救フベカラザルニ至ラントス。・・・・・・況ンヤ事大党、即チ支那ヲ仰戴スルヲ好ムノ輩社会ノ実柄ヲ制シ国王及ビ開化党ノ力竟ニ之ニ勝ツ可カラザルノ勢アルヲヤ」（伊藤博文編、前掲書、一二八頁）という文章がある。「事大党」・「独立党」の枠組みが典型的に現れるこの文章は、『秘書類纂』の中でも浮いているように思われる。この文書の作成者として書かれている七人―藤田茂吉、箕浦勝人、犬養毅、尾崎之雄、森田文蔵、枝元長辰、矢野貞雄―は、全員『郵便報知新聞』関係者であったが、同時に福沢諭吉の門下の人々でもあった。（丸山信編『人物書誌大系三〇　福沢諭吉門』下　東京：日本アソシエーツ、一九九五年の個々人に対する項目を参照。）